


普通のOLがトリップしたら  
どうなる、こうなる



ヒューゴ&ジーナ

宿屋兼食堂を営む夫婦。  
異世界でのセイラの親代わり。

サイラス・ロンバート

大国セフィラードの王。  
冷酷で残虐だという噂があり、  
「死神陛下」と呼ばれている。

ヘイズ・マグワイア

セフィラード王の近衛隊の  
副隊長。エリートだが年若く、  
モデルのような顔立ち。

イヴ

セフィラード国の城に勤める  
侍女。男爵令嬢。寡黙で  
生真面目な女性。


ローリ

セフィラード国の城に勤める  
侍女。子爵令嬢。たおやかな  
印象の女性。

メル

宿屋にやってきた客。  
ワイルド系のイケメン。  
ただの旅人だと思っていたら、  
実は……!?

登場人物紹介



せら  
世良綾子

突然、異世界にドリップした  
OL。行き倒れていたところを  
ヒューゴに拾われ、村の宿屋  
で働き始める。

目次

第二章	セフィラード編	155
第一章	ブランシャール編	7

## 第一章 ブランシャール編

「ここ、どこ……?」

目を覚まし、半身を起こした私——世良綾子は呆然として咳ぐが、返ってくる言葉はない。右を見ても左を見ても、木々が生い茂っているばかり。

状況が呑み込めない不安から、地面についていた手を握り込む。するとカサリという音がしたので、地面に視線を向けた。

そこにあったのは、慣れ親しんだアスファルトではなかった。茶色い枯れ葉が、まるで絨毯のように敷き詰められている。

その上に座り込んでいる私の周りを、見たことのない虫が忙しそうに歩き回っていた。

「っ!」

声にならない悲鳴を上げ、慌てて立ち上がる。身体に虫がくっついていられるかもしれないと思い、必死に手で払った。

「気持ち悪い……な、なんなのよ、ここ……」

再び視線を巡らせるものの、やはり見覚えのない場所だ。

「山？ 森？」

目を凝らしても、場所の手がかりになりそうな建造物などは見当たらなかった。

「どうして……どうして私がこんなところにいるのよっ！」

半ば叫ぶように上げた声は、周りの木々に吸いこまれていく。

少し乱れた息を整えようと、深呼吸を繰り返した。

すると、土と太陽の匂いが鼻腔をくすぐる。

……昔、こんな匂いをほぼ毎日かいていたなあ。

陽射しを浴びて元気にグラウンドを駆け回った、体育の授業。そのあとは、決まってこんな匂いがしたっけ。

懐かしい匂いをかいだことで、ほんの少し冷静さを取り戻す。

「落ち着かなきゃ……落ち着いて……」

目を閉じて耳を澄ますと、色々な生き物の鳴き声が聞こえてくる。チリリという鈴のような虫の声に、ピーーという高い鳥の声。

ゆっくりと目を開けば、木々の隙間から射し込む太陽の光が見えた。その光を浴びて、緑色の葉が鮮やかに輝いている。

結構良いところかもしれない。

——友達や恋人や家族と一緒にならば。

——自分が知っている場所ならば。

——自分の意思で来たならば。

しかし今は一人ぼっち。ここがどこなのか、どうしてこんなところにいるのかもわからない。

頼みの綱は手の中の携帯だけ。しかし、残念ながら圏外……さらに悪いことには、充電も残り半分を切っている。

考えれば考えるほど、不安と焦りだけが募っていく。わずかに取り戻した冷静さは、あつという間に失われた。

「嘘だと言ってよ……誰か、誰か助けて！ お母さん、お父さん！ ……神様!!」

## 1 突然のトリップ

——その日は、いつもと変わらない一日になるはずだった。

「綾子、あんたまだ結婚しないの？」

金曜の午後。パソコンと書類の数字を見比べていると、同僚の山口紗枝が話しかけてきた。

私と彼女は二年前、事務機材を取り扱う会社に入社し、総務課に配属された。それ以来、気の合う友達として付き合っている。

お互いの恋愛遍歴はもちろん、彼氏には言えない失敗談まで暴露し合った仲だ。だから、彼女の質問には遠慮がない。

「んー、私はそろそろしてもいいかなあと思ってるんだけど。いくら草食系とはいえ、プロポーズくらいは向こうにして欲しいんだよね」

苦笑しつつ本音を漏らす私に、紗枝が尋ねてくる。

「付き合ってもう五年だっけ？」

「大学のときからだから、それくらいになるかなあ？」

今の彼氏とは、大学の一回生の終わり頃から付き合い始めた。友達として遊んだりしているうちに惹かれ合った。

とはいえ、さすがに五年も経つと情熱は薄れ、互いにいい意味で空気のような存在だ。

一緒にいてもそれぞれが好きなことをしているし、沈黙が続いても気まずくならない。

熱烈な愛情こそないものの、この人との家庭なら想像できる——そんな関係だった。

だが、肝心のプロポーズはまだされていない。

「このままだと、ゴールは遠そうだねえ」

彼氏の草食男子ぶりを知っている紗枝は、遠い目をしながら言った。

「まあ浮気するような人ではないし、気長に待ちます」

「私の方が早かったりして」

「まだ彼氏もない人には、負けませーん」

「わかんないよ？ 私ねえ、今日合コン行くの。そこで運命の出逢いがあるかもしれないし」

紗枝はにんまりしたあと、一瞬迷うようなそぶりを見せて再び口を開いた。

「でさ……その合コンなんだけど、綾子も行かない？」

私はふうと息を吐いてから、紗枝を軽く睨む。

「それが本題なんですよ」

紗枝から飲みに誘われることはよくあるが、合コンの誘いは初めてだ。もちろん彼氏の存在を知られているからというのもあるけれど、一番の理由は別にある。

——似ているのだ。私たちの雰囲気とか、異性の趣味が。

私も紗枝も、こげ茶色のセミロングヘアで、体型もそっくり。さらには好きな俳優も、好きな映画も好きな本も、ことごとく同じ。

趣味がよく似ているからこそ、二年という短い時間でこんなに仲良くなれたわけだけだ。

……二人で飲むのは最高に楽しいが、合コンではキャラや気に入る相手が被ることが予想されるので最悪だ。だから決して誘ってこないと思っていたのに……

一体どういう風の吹き回しだろう。

理由を聞いてみると、とても単純なことだった。

今日参加するはずだった女の子のうち二人が、来られなくなったらしい。

一人は風邪で寝込んでしまい、もう一人はものもらいができてしまったという。

確かに、合コンにまぶたが腫れた状態に参加するのは嫌だろう。

不参加が一人だったら、男四人に対して女三人だから、まあギリセーフ。

男四人に対して女二人だとちょっとキツイ。女子の一人がトイレにでも立とうものなら、一気に

四対一だ。

でも合コンをキャンセルするには惜しいランクの男性ばかりなのだそう。そこで急遽、私に白羽の矢が立ったというわけだ。

ま、彼氏持ちだから恋敵にもならないし、うってつけなんだろう。事情はよくわかったけれど、いざ参加するとなると少し考えてしまう。

「お願いっ！」

「……彼氏いるしなあ」

「いいじゃん。どうせ数合わせ要員なんだし。座っててくれるだけでいいから！ 普通にご飯食べ、お酒飲みに行くだけだと思って。ね？ お願ひ綾子！」

紗枝は顔の前で両手を合わせ、上目遣いで頼んでくる。

滅多に人を頼らない親友にこうまでされては、さすがに断れない。

「ま、別にいいけど……明日のランチ奢ってくれる？」

「デザートも付けちゃう！」

「よし、乗った！」

「ありがとう！ やっぱ、もつべきものは親友だね！」

そう言っ、勢い良く抱きついてくる紗枝。

「ゴホン」というわざとらしい咳払いが聞こえたのでそちらを見ると、上司が睨んでいる。私たちは慌てて仕事に戻った。

彼氏には悪いが、たまにはこうやって危機感をもたせることも必要だろう。そんな軽い気持ちで、合コンへの参加を決めたのだった。

「山口紗枝です。二十四歳、トキワ興産で総務してま〜す」

「世良綾子です。二十四歳、私も彼女と同じ総務課で働いています」

全員が簡単な自己紹介をしたあと、食べたり飲んだりしながら合コンは進む。

紗枝が言っていた通り、確かに男性陣のレベルは高い。その上ガツガツしておらず、大人の余裕を感じる。

会場であるイタリアンレストランも良い雰囲気だった。

彼氏がいる私は、女性陣のフォローをしたり場を盛り上げたりと、裏方に徹した。もちろんこの合コンで新たな恋を見つけようなんて気はなかったのだが、隣に座っていた男性とメアドを交換してしまった。

草食系かと思っていたら中身は肉食系だったようで、一度ははぐらかしたものの断り切れなかったのだ。

仮にも合コンに参加しておいて、連絡先の交換を強く拒否するのも不自然だし……仕方ないよね？

そんな言い訳を自分にながらも、その強引さにグツときたというのが本音だ。

彼氏に対してちよつぱり罪悪感があったけれど、帰宅途中に相手から早速送られてきたメールを

見て、思わず笑みを浮かべてしまった。

自宅に戻ってすぐ、靴を脱ぎながら返信メールを打つ。

実は最近ほんの少しだけ、彼氏が自分を女として見てくれないのを不満に思うことがあった。そんな中、今回合コンで久しぶりに女扱いされて、ちよつと満足感を覚えていた。

とはいえ、彼氏を裏切るつもりは全くない。

私は返信メールの文面が当たり障りのないものであることを確認してから、送信ボタンを押した。そして携帯を、ベッドにポイツと投げ捨てながら考える。

あとはお風呂に入って、寝ればいい。

頭ではそう段取りをつけるが、お酒の入った身体はこのまま眠ってしまえと訴える。

……だめだ。せめてメイクは落とさないと、明日後悔する。

のろのろと洗面所に向かい、メイクを落とす。着ていた服をその場に脱ぎ捨てると、部屋着に着替えて歯を磨いた。

今は春先の涼しい時季なので、日中はほとんど汗をかかない。シャワーは明日の朝にしようと考えて、ベッドに倒れ込んだ。

その拍子に、手に当たった携帯を持ち上げる。

彼氏には紗枝に頼まれて合コンに行く伝え、OKをもらっていた。

さすがの草食君でも、『まだ飲んでるのか?』とか『もう家に着いた?』とか聞いてくれるかな、と期待しつつ携帯を確認するが、着信もメールもない。

「全く……信用されてるって喜ぶべき? それとも無関心すぎると怒るべき?」

そんな複雑な気持ちで携帯を握りしめたまま、私は眠りに落ちていった。

——はずだった。



「誰か助けて!!」

半狂乱になって叫んでも、誰も助けに来てくれず、時間だけが過ぎていった。

日が陰り始め、森は薄暗く不気味な雰囲気ふんいきを漂たなわせつつある。

時間の経過と共に少し冷静さを取り戻した私は、改めて状況を確認してみた。

「名前は世良綾子、歳は二十四歳、トキワ興産のOLで、家は——」

心細さから、ついつい声に出してしまう。

「うん、覚えている。大丈夫。別に頭が変になったわけでも、記憶喪失になったわけでもない。服は部屋着のまま、靴も履いてない。でも足の裏は汚れてないから、夢遊病とかでもなさそう」

モコモコとした部屋用の靴下には、ほとんど汚れが付いていなかった。だから、自分で歩いて来たのではないことがわかる。

「まさか……誘拐だったにして」

自分で言っておいて、すぐに『それはない』と首を振る。



「……どんな間抜けな犯人でも、人質に携帯持たせたままってことはないよね」  
そう呟いて携帯をギョツと握りしめたとき、最悪なことに気が付いた。

——持ち物は、これだけ。つまり、財布……お金がない。

現代社会では、お金さえあれば何とかなる。足りないものは買えばいい。道がわからなければタクシーに乗ればいい。お腹が空いたらレストランに入ればいい。

そんな当たり前のことさえ、今の私にはできないのだ。

「と、とりあえず……日が完全に落ちる前に森を出なきゃ」

震える声で、小さく呟く。

今は静かな森でも、夜になると野生動物が出るかもしれない。

ウサギやリスなら可愛いものだが、イノシシや野犬に遭遇したらと思うと怖くて仕方がない。ましてや熊などに遭遇してしまつたら……そうならないことを祈るばかりだ。

森を出ようと決めたものの、サバイバルの知識などない私は、太陽の方角からかろうじて東西南北がわかる程度。

それに虫が大の苦手なので、本当なら一歩たりとも動きたくない。

しかし、そんなことは言つてられない。ここにいたら死ぬかもしれないのだ。

「まずは……川を探そう。川に沿つて山を下れば、街に出られるかもしれないしね」  
そんな微かな希望を胸に、私は歩き始めたのだつた。

「……はあ、はあ」

自分の荒い息遣いだけが聞こえる。

この森を抜けようと歩き出して、今日で三日目。

幸い野生動物には遭遇していないが、人や出口も見つかっていない。

というのも、靴を履いていないので、小枝や小石だらけの山道を思うように歩けないのだ。

かろうじて川は見つけたが、それに沿つて下つても、街は一向に見えてこない。

こんな非常事態であるにもかかわらず、川の水を飲むことには抵抗があつた。

なんせ、水道水も飲まない現代っ子だ。水といったら、ミネラルウォーターをコンビニで買うも

のだと思つていた。

煮沸もしていない川の水を飲むなんて無理。不衛生だし、お腹を壊しそうだ。

だから、ひたすら我慢していったのだが……耐えられたのは、昨日までだった。

飲まず食わずで二日間さまよい続け、すぐ横には綺麗な川。

もう限界だと思ひ、川に顔を突つ込む勢いで流れる水を口にした。

——ただの水を、あれほど美味しく感じたことはない。

案の定、お腹の調子は良くない。それでも、干からびてしまうよりはマシだ。

しかし固形物を食べなければ、飢えはしのげない。

何度か野生のキノコが生えているのを見たが、見た目からして毒々しいそれらに手を出す勇氣はなかつた。

せめて果実の類でもあれば、手を伸ばしたかもしれない。

だが、これだけ木があるというのに、果実が生っているものは見当たらなかった。その上、身体がどれだけ疲れていても、熟睡できないのだ。

野生動物に襲われるのが怖くて、小さな物音で飛び起きる。そんな夜を過ごしていた。このままでは、確実に衰弱死してしまう。

平和な日本に住んでいながら、まさかこんな目に遭うとは思ひもしなかった。

それでも気力を失っていないのは、川に沿って下るにつれ、木々の密度が薄れていくのを実感していたからだだった。

心は『早く、早く』と急ぐものの、身体がついていかない。

しかし、やがて前方に木々の切れ目が見え、私の目から涙が溢れ出た。

——助かった!!

あちこち痛む身体を、気力だけで無理やり動かす。

やつとのことで森を出た私は、辺り一面を見渡した。

どうやら私がいたのは、巨大な山だったようだ。背後にそびえるそれを見上げて、三日で抜け出したことは幸運だったかもしれないと思う。

だが、全てが解決したわけでもなさそうだ。眼下には、馴染みのない景色が広がっている。アスファルトも車も、ビルも電線もない。かといって、田んぼや畑があるわけでもない。

——ここは一体、どこ……? ?

そのとき、携帯の存在を思い出してハツとする。慌てて確認すると、私の目に映った文字は『圏外』。

一気に身体から力が抜け、立っていられなくなる。体力はとづくに尽きていて、気力も限界だったのだ。

携帯が手から滑り落ち、自分の身体も崩れ落ちていく。

草が生い茂る柔らかい地面に倒れ込むと同時に、私の意識は闇に呑み込まれていった。



——暖かい……

顔を押し付けている枕から、柔らかなハーブの香りと微かな太陽の匂い。それにどこからか、パンの焼ける香ばしい匂いが漂ってくる。

意識がはつきりしてくるにつれ、ひどい夢を見たことを思い出した。

そのとき、ふと疑問に思う。一人暮らしなのに、どうしてパンの焼ける匂いがするのだろうか。

身体はまだ寝ていたいと主張するが、無理矢理起き上がって目を開いた。

陽射しの眩しさに思わず目を細める。その目に映ったのは——自分の部屋ではないどこか。

都会のマンションの白い壁紙に慣れた私には、まるで馴染みのない木の壁。家具も全て木製だ。

古そうだが、よく手入れのされた家だ。

天井に照明はなく、明かりは大きな窓から射し込む日の光だけ。それでも室内は十分に明るい。温かみのある素敵な部屋だが、全く心当たりがない。

「ここ……どこ？」

呆然として、この数日間何度口にしたかわからない言葉を呟く。

夢だと思っていた……いや思いたかったけど、どうやら現実だったようだ。

気を失って倒れていた私を誰かが見つけて、病院かどこかに運んでくれたのだろう。

とりあえず、餓死と、野生動物の餌になることは免れたらしい。そう思っただけで安堵したとき、わずかな音と共に部屋のドアが開いた。

看護師さんかな？ と予想した私は、そこから顔を覗かせた人物を見て驚いた。

——え？ 外国人……なの？

日本人には馴染み深い、こげ茶色の髪と瞳をもつ五十代半ばくらいの女性。けれどその顔立ちは、明らかに日本人のそれではない。

倒れる直前までさまよっていた森は、確かに見覚えのない場所だった。まさか私は今、海外にいるのだろうか？

混乱して、思わず固まってしまふ。

私が目を覚ましていたのを見て、女性は一瞬目を見開いたあと、笑みを浮かべて近寄ってきた。

「……………」

耳慣れない言語で話しかけられたが、当然何を言っているのかわからない。

「……………」

戸惑う私をよそに、女性は早口で話し続ける。注意深く耳を傾けても、やはりどこの国の言葉かわからなかった。

「あ、すみません。もう少しゆっくり話してもらってもいいですか……？」

まず日本語は通じないだろうと判断した私は、拙い英語で話しかけてみる。文法は多少変でも、言いたいことは伝わるかもしれない。

「……………」

だめだ。英語も通じないらしい。

「ニイハオ、ボンジュール、ナマステ、チャオ、オラ、トゥリマカシー、ジャンボ——」

こうなったら、意味なんてどうでもいい。色んな国の言葉を、思いつく限り口にする。何か一つでも反応してくれたら女性の国籍に大体の見当がつく。

しかし女性は困った顔でこちらを見つめるだけだったので、私は諦めた。

俯いてしまった私の肩を、女性がポンポンと優しく叩く。励ましてくれているのだろう。

そのまま肩に置かれた手の温もりを感じながらも、私の心は不安でどんどん冷えていった。

——この日から、私の新しい生活が始まったのである。

「セイラご飯だよ！ 今日夕方から忙しくなりそうだから、食べられるときに食べておきな！」  
ジーナさんの大きな声に「はい！」と返事をしながら、私はお客さんが帰ったあとのテーブルを片付ける。

彼女は私が目覚めたとき介抱してくれた女性で、この宿屋兼食堂を夫であるヒューゴさんと二人で経営している。

厨房を見ると、料理人であるヒューゴさんが、美味しそうな賄い料理を用意してくれていた。

——早いもので、私がこの世界に来て二年が経つ。

自室に戻った私は、ヒューゴさんが作った魚のトマト煮を食べながら、ここに来た当初のことをボンヤリと思い出してみる。

目覚めたら見知らぬ森にいた私。死ぬ思いでその森を抜けたものの、結局行き倒れてしまった。

私を見つけてくれたのは、ヒューゴさんだった。人口八十人程度のこの村に病院はなく、ヒューゴさんが営む宿屋に私は運び込まれた。

命は助かったものの、言葉は通じず、自分がいる場所がどこなのかもわからない。

日本じゃないかもしれないとは思っただけで、地球上のどこかであることは信じて疑わなかった。

どうやら『異世界』に迷い込んでしまったらしいと気付いたのは、かなり時間が経ってから。

——誰かに話したら突拍子もないと笑われるかもしれないが、まぎれもない事実。

何しろこの世界の人々は、地球というものが何なのかすら知らないのだから。

私が目覚めた直後、ジーナさんは自分の胸をトントンと叩きながら、「ジーナ」と繰り返した。それを何回も聞いたあとで、ようやく彼女の名前だと理解した。

私は名乗り返そうと口を開きかけたものの、躊躇した。助けてくれた恩人とはいえ、見ず知らずの彼女を信頼していいものか迷ったのだ。

だから念のため、下の名前は明かさず名字の『世良』だけを名乗ることにした。

ジーナさんたちにとって『世良』というのは発音しにくいようで、『セイラ』という呼び名が現在では定着している。

今でこそ日常会話は問題なくできるが、ここまで話せるようになるのに二年近くかかった。何しろ「これは何ですか？」と尋ねたくても『何』という単語がわからないのだ。

仕方なく、私は身近な物の名前から覚えていった。

たとえば林檎を手に取り、ジーナさんの眼前にズイツと突き出す。不躰かもしれないが、私が言葉を練習中だと知っているジーナさんは、この世界での林檎の名前を繰り返し発音してくれた。それを私も真似して口に出す。そうやって、少しずつ語彙を増やしていったのだ。

半年が経ち、片言ではあるが何とか意思の疎通ができるようになった頃、偶然にもこの世界における『何』という単語を知ることができた。

それはジーナさん夫妻と共に、食堂の新メニューを考えていたときのこと。ふと、いたずら心が湧いた。

——ア・レを見たら、二人はどういう反応を示すだろう、と。

私はお店の厨房で『おはぎ』を作ってみた。クッキーやケーキはこの世界にもあるが、あんな独特の形状のお菓子はさすがにない。

小豆あずきによく似た豆で作った『おはぎ』もどきは日本で食べていた物にそっくりで、私は懐かしくなつた。

早速ジーナさんたちに見せると、二人は怪訝な表情で「コレ、何だ？」と呟つぶやいた。

私はハツとして、手近にあった林檎りんごをつかみ、二人の目の前に差し出した。そして二人が口にした言葉を真似てみると、彼らは「林檎だ」と答えてくれたのだ。

それからというもの、私は言葉だけでなく、この世界についての様々な知識を急速に身につけていったのだつた。

さらに一年が経ち、すっかり言葉に不自由しなくなった頃、宿屋で住み込みで働かないかと誘われた。

そうなれば、わずかだが給金がもらえ、住む場所にも食事にも困らない。この世界では身寄りのない私にとつて、願ってもない話だった。

ここに来て間もない頃は、身体が回復したら法外な金額を請求されるんじゃないか？ もしくは売り飛ばされるんじゃないか？ などと疑い、ビクビクしながら過ごしていた。

だが恐れていたような事態にはならなかったばかりか、ジーナさんたちは私の過去さえ尋ねなかった。「何も聞かないんですか？」と私から切り出してしまったほどだ。

それでも二人は「話したくなつたら話してくればいいよ。誰にでも、話したくないことの一つや二つあるもんさ」と言ってくれたのだつた。

そんな彼らのことを、私はいつしか心から信頼するようになっていた。だから宿屋で働くことを、二つ返事で了承したのだ。

懐かしく思い出していたら、階下から呼び出しがかかる。

「セイラ、すまないねえ。少し混んできたから手伝ってくれるかい」

ジーナさんの読み通り、夕方を迎えて忙しくなってきたみたいだ。ありがたいことに、村に一軒しかない宿屋兼食堂は繁盛はんじょうしていた。

「今行きますー！」

私は残っていた料理を急いで頬張り、自分の部屋を出る。

この部屋は、私が最初に目を覚ました部屋だ。元は客室だったようだが、あの日以来、私が借りている。

二階から下りていくと、常連客の一人が「セイラちゃん、休憩だったのかい？」と親しげに声をかけてきた。

今ではこの店の看板娘——というには若干年をとっている気もするが——として、村人からも受け入れられている。



「ところで、今日のおすすめはまだあるかい？」  
先程声をかけてきた常連客に尋ねられた私は、厨房の方へ向かう。

「ヒューゴさん、今日のおすすめ、まだ残ってますか？」

「ああ、まだ大丈夫だ。休憩中だったのに、すまないな」

鍋の中身を確認したヒューゴさんが、カウンタ―から顔を覗かせた。長めの髪を一つにまとめ、あごひげを蓄えた姿はなかなかにかに洗い。おしゃべりで陽気なジーナさんに対して、ヒューゴさんは真面目で実直。お似合いの二人である。

「ありがとうございます。じゃあ『何杯でも食べてください』って伝えてきますね」

厨房を離れ、お客さんのもとに戻る最中にも次々と声がかかる。

「セイラちゃん、こっちにビールを頼む」

「この肉美味いな、もうひと皿追加できるか」

客席の間を縫って歩き、慣れた動作で給仕する。

客のほとんどは傭兵だ。この宿には——というよりこの村には、地理的な事情で傭兵が滞在することが多い。

「おい、聞いたか？ あの噂」

「ああ。王太子派と大公派が戦を始める日が近いみたいだな」

「どっちが王位に就こうがどうでもいいから、早くこの内乱が終わって欲しいよ」

「何を言うんだ。王太子のレオンハルト様が王位に就くべきだろ」

「だがレオンハルト様は病弱だというし、先王の弟である大公様の方が、国王に相応しいんじゃないか？ 何と言っても、武勇で鳴らした方だしな」

「……武勇は認めるが、残虐すぎる。民を虫ケラのように扱うマーカム様は、王の器ではないだろう」

「それを言うなら隣国の国王は、マーカム様よりずっと残虐だというじゃないか。通ったあとには草一つ残らない、冷酷な死神だつてな。でも、あの国は俺たちの国よりよほど豊かだぞ」

「確かにな。ま、いずれにせよ早く決着をつけてもらいたいものだ。セフィラード王が、この好機を逃すとは思えないからな」

「ああ、全くだ」

お酒が入った男たちの大きな声は、聞くつもりがなくなるとも耳に入ってくる。どのテーブルも、同じ話題で盛り上がっているようだ。

戦……想像するだけで肌が粟立つ。しばし考え込んでいた私は、お客さんに呼ばれて我に返り、仕事に戻った。

その日の夜、仕事を終えた私は自室で一人、戦について考えていた。

この大陸には、土地を東西と南に分ける形で三国が存在している。一番大きな国は死神のように冷酷な王が治めていると噂される東のセフィラードで、大陸の半分以上を占めている。私がいる国——ブランシャールはセフィラードの西に位置しており、他の二国より小さいが、歴史はもつと

も古い。南にあるスウォードという国は閉鎖的で、他国とほとんど交流がないらしい。

そして食堂でお客さんたちが話題にしていたこの国ブランシャールの内乱は、二年ほど前に国王が亡くなったことがきっかけで始まったという。王位をめぐる、前王の実子である王太子レオンハルト様と前王の実弟である大公マーカム様が争っているのだ。

この村は王太子派だが、大公派の領地と隣国セフィラードに挟まれている。そのため大公派の領地との間で諍いが絶えず、また隣国が内乱に乗じて攻め込んでくるという噂もあって、たくさんのお兵が入りしているのだった。

どっちが国王になっても、私たちの生活は大して変わらないだろう。どっちでもいいから、早く王位に就いて欲しい。

もしも死神陛下——セフィラード王がこの地を治めることになったらと思うと、ゾツとする。敗戦国の民として奴隷のように働かされ、重税に苦しむことになるのだろうか。

今以上の肉体労働をさせられたら、私はとても耐えられそうにない。

村の人たちは、皆たくましい身体つきをしている。機械など一つもない世界なので、農作業にしろ日常生活にしろ力があるからなのだが、私はいえ、未だに井戸から水を汲むだけで疲れてしまう。

ただ、そんな私にも、ひとつ村の人たちの役に立てることがあった。小学校から大学まで十六年間も勉強してきた私はここでは、かなり博識らしい。

この世界では、まともな教育を受けられるのは貴族や裕福な大商人の子弟だけで、村に住む人た

ちは教育らしい教育を受けたことがないという。

そのような中、私のもつ数学の知識はとても重宝された。

便利な公式をたくさん知っているし、総務課で働いていた私にとって数字は身近なものだった。だから、この宿の帳簿付けを任されたのだ。

ジーナさんもヒューゴさんも、とても喜んでくれている。ようやく二人の役に立てた気がして、私も嬉しい。

でも……この世界で生きていく術すべを見つけ、それなりに楽しい生活を送っているところへ、戦争の影が忍び寄っている。

私はランプを消してベッドに潜り込み、『どうか明日も平穏な一日でありますように』と願うのだった。



「セイラ、ちょっといいか？」

ある日、仕事を終えた私はヒューゴさんに呼び出された。

「急にすまないな。来て欲しいところがあるんだ」

そう言われて連れて行かれたのは、私が行き倒れていた場所だった。

来るたびに、懐かしいような、腹立たしいような、何とも言えない気持ちになる。

実は、ここには何度も足を運んでいるのだ。——携帯を探すために。

村で暮らし始めてしばらく経ってから、持っていたはずの携帯がないことに気付いた。

気を失ったときに落としたんだろうと思ひ、暇を見つけては探しに来ていたのだ。

もし誰かに拾われたならば、不思議な機械に小さな村は騒然となるはず。だが、未だにそんな騒ぎは起きていない。

——だから、きつとまだここにある。

そう信じて、あれから二年以上経った今も探し続けていた。

当然、充電は切れているだろうし、それどころか雨に濡れて壊れている可能性が高い。

だが私がかつていた世界が現実のものなだと、妄想の産物などではないのだと、唯一ゆい証明できる存在なので、諦められなかった。

いや、いつそのこと、あの世界が私の夢だったら良かったのに……それなら、私がいなくなったことで親しかった人たちを悲しませなくて済むのに……

そんな複雑な思いで、夜風に揺れる草を眺めた。

私の隣で同じように草を見つめていたヒューゴさんが口を開く。

「ここで初めてセイラを見たときは、死んでるのかと思ったよ」

「ヒューゴさんが見つけてくれなかったら、本当に死んでたかもしれせん」

私の言葉に、ヒューゴさんは小さく頷く。

すると二人の間を、ザアーツと風が吹き抜けた。この二年でかなり伸びた私の髪が、風に靡なびく。



肩につかないくらいの長さだったのに、今では胸の辺りまである。

手で髪を押さえながら、ふと顔を上げると、ヒューゴさんと目が合った。

「セイラ……これに見覚えはあるか？」

そう言つて、ヒューゴさんがズボンのポケットから取り出した物。

——携帯電話だ。

「……こ、これ！ 私のです！」

私は震える手で、それをヒューゴさんから受け取る。

プラスチックカバーは艶を失つてざらつき、変色していた。だが、そのボロボロのカバーを外してみたら、意外と本体は綺麗なまま。

——まさか、ね？

そう思いながらも、微かな期待を込めて電源ボタンを押してみた。

「嘘っ……」

携帯の画面には、あの人工的で懐かしい光が煌々と点つたのである。

信じられないという思いと、もしかしたら帰れるかもしれないという思いが溢れて言葉が出ない。

「やはり、セイラ之物か……」

「……ヒューゴさん、どうして私の物だと思つたんですか？」

見慣れないからといって、私の物とは限らないはずだ。傭兵たちの落とし物かもしれない。

「あの日以来、セイラが暇を見つけてはここで何かを探していたのは知っていた。それに、まだ言

葉が不自由だったとき、『これくらいの青くて四角い箱を見なかつたか？』と身振り手振りで俺やジーナに尋ねたことがあつただろう？」

「あ……」

一応目立たないように探していたつもりだが、気付かれていたとは。その上、一度だけ尋ねたことを覚えていてくれたなんて。

「よほど大切な物を失くしたんだろうと思つて、ここを歩くときには気を付けていたんだ。幸い……と言つていいのかわからんが、この辺りは自警団の巡回路になっているしな」

「そうだったんですか……」

「今日、見回りしてたら偶然足に当たつたんだ。とはいえ『青い箱』と聞いていたから違つかとも思つたんだが、聞くだけ聞いてみようと思つてな……」

「あ、本当だ。確かにこれじゃ『黄色い箱』ですね」

ヒューゴさんの言うように、元々青かつたプラスチックカバーは変色して黄色になっている。やっと思つて見つけられたことが嬉しくて、自然と口元が綻んだ。

だが、お礼を言おうとして視線を上げたとき、不思議そうな顔で見つめるヒューゴさんの姿を見て血の気が引いた。

この世界の人にとっては、未知の素材でできた不思議な物体。それを慣れた手つきで使つてみせた私を、ヒューゴさんはどう思つただろう。

ここで『これは異世界の物で、私もその世界から来たんです』などと言つたら、頭がおかしいと

しか思われたいはずだ。

——だめ、絶対に言えない。

一人になってから試してみるべきだった。……自分の迂闊な行動が悔やまれ、携帯を握る手に入がらぬ。

「セイラ、大丈夫だ。それが何なのか俺にはわからないが、問い詰めるつもりはない」

私の様子から何かを察したようで、ヒューゴさんは子供をあやすように優しく頭を撫でてくれる。「そうか、セイラの物だったか。なら、踏みつぶさなくてよかったよ」

冗談っぽく笑ったヒューゴさんに、私はお礼を言うことしかできなかった。

部屋に戻ったあと、携帯をそっとポケットから取り出す。懐かしい手触りを感じて、日本への、そして家族や恋人への思いが一気にこみ上げる。

——帰りたい!!

枕に顔を埋めて声を殺してひとしきり泣いたあと、ゆつくりと携帯を操作する。

久しぶりだというのに、違和感など全くない。そのことに、私はまだ地球の現代人なんだと安堵する。

微笑みながら、携帯に詰まった思い出——写真をめくる。

家族に、彼氏に、紗枝。車に新幹線、飛行機まで写っている。女子だけの飲み会で撮った変顔写真に、水族館の赤ちゃんペンギン。全てが懐かしく、愛おしかった。

そんな中、記憶にない写真を見つけて手を止めた。

……これ、なに？

そこに写っていたのは、仲良く寄り添う二人の男女。紗枝と……私の彼氏だ。友達同士というには親密すぎる雰囲気である。

嘘……浮気？ 一つの写真よ……許せない！

どす黒い感情が、私の思考を乱す。

だが私が日本にいた頃、二人の間にそんな気配など全くなかった。そもそも本当に紗枝なのだろうか？ 何しろ私と紗枝はよく似ているのだ。見間違えても不思議ではない。

そう自分に言い聞かせ、もう一度、祈るような気持ちで確認した。

——間違いない。これは紗枝だ。……だが、どこか違和感がある。

「あ！」

その違和感の正体に気付いて、思わず声を上げた。

「髪が、長い……」

それに拡大してよく見れば、顔も少し老けて見える。

紗枝だけでなく彼氏の方も、髪に白いものが交じっていた。

「もしかして……これって未来の写真？」

慌てて続きに目を通す。

「やっぱり。見覚えのない写真ばかり……」

——私の部屋で、一人佇む彼。

壁に掛かっている電子カレンダーは、私がこの世界に来た日のひと月後の日付になっていた。

——警察署らしき場所で、警察官と揉めている彼。

いつも穏やかだったのに、怒りを露わにしている。

——泣いている彼と、寄り添う紗枝。

紗枝も泣き腫らした目をしている。二人のそばには、『世良家』と書かれたお墓がある。

次男である父が建てたもので、まだ誰も入っていないはずだ。けれど線香からは煙が立ち上り、花立には真新しいひまわりが飾られている。

ひまわり。私が一番好きだった花。きつと、私は死んだことにされたのだろう。

日本の法律では、失踪して七年経つと死亡扱いになる。つまり向こうでは、それだけの年月が流れたということだ。

「私は死んでない……ここで生きてるよ。心配かけて……そして悲しませてごめん」

その思いを、伝えられる術はない。だから彼らはきつと今も、私の身を案じてくれているのだろう。どこかで生きているかもしれないと……

私は、改めて二人が寄り添う写真を見る。先程までのどす黒い感情は消えており、「ありがとぅ、ごめんね」という心からの言葉が涙と共にこぼれ出る。

心配をかけた分、二人には幸せになってもらいたかった。

どうやらこちらの世界は、元いた世界とは時間の流れが違うらしい。帰る方法を見つけた頃には、

浦島太郎のような状態になってしまおうだろう。

……それでも私は、帰ることを諦めない。愛しい人たちは、皆日本にいるのだから。

そう思い、携帯を使って紗枝や家族に連絡を取ろうと試みたが、失敗に終わった。

私がかっかりした気持ちで電源を落とす。そして、黒い画面を眺めながら考えた。

今まで雨ざらしだったはずの携帯がまだ使用できること。いくら使っても充電が減らないこと。撮った覚えのない写真が存在すること。

全く、不思議なことだらけだ。

「ま、一番の不思議は『私がこの世界に来てしまったこと』だけど……」

なんて自嘲気味に言いながら、手の中にある携帯を愛おしげに撫でるのだった。

### 3 運命の出逢い

携帯が手元に戻ってきたものの、帰る手立ては見つからないまま、さらに一年が経過した。

日本への帰還を諦めてはいないが、ここでの暮らしにすっかり慣れてしまった。

「いらっしやいませ。お泊まりですか、お食事ですか？」

カランツとドアベルを鳴らして入ってきた一人の男性を、愛想良く迎える。

フードの付いた外套を着ている。おそらく旅人だろう。三十歳くらいかな？ 背がとても高い。

「宿泊したい。部屋は空いてるか？」

低い声でそう尋ねながら、フードをばさりと取り払う男性。

露わになった髪は、この国では珍しい金色だった。瞳もこれまた珍しい、深い蒼色である。

とはいえこの宿には他国からも傭兵がたくさん泊まりにくるため、今さら金髪碧眼を見てもどうということはない。

気になったのは、その顔立ち。これまでに見たことがないほど整っているのだ。

だが意志の強そうな眉と鋭い瞳は、どこか野生の獣のような印象を与える。

「ありがとうございます。部屋は空いています。一泊二十デリ、お食事付きなら三十五デリになります」

私は内心の驚きを顔や態度には出さず、いつも通りの言葉を紡ぐ。

「とりあえずこれだけ頼む」

男性は懐から皮袋を取り出し、放つてよこした。

慌てて受け止めると、ずっしりとした重みがある。

「少々お待ちください」

そう言つて中を確認すると、きつちり千デリ入っていた。

持ち歩くには多すぎるように思われるその金額にギョツとしつつも、私は素早く計算する。

「食事なしなら五十日、食事付きなら二十八日程度ですが、どうなさいますか？」

男性は驚いた表情を浮かべたが、次の瞬間には私を見てニヤリと笑った。

「……食事付きだ。足りなくなったらまた払う」

「お部屋は二階です。先にお荷物を運んでおきますので、宿帳にお名前をご記入願います」

荷物を男性から受け取り、あとのことはジーナさんに任せて私は二階の角部屋へ向かった。

荷物をその部屋に入れたら、ついでに他の部屋の用事も済ましてしまう。階下に戻ったとき、すでに男性の姿はなかった。

開かれたままの宿帳を確認すると、男性のものらしき名前があった。

識字率の低いこの世界では自分の名前も書けない人が多く、ジーナさんが代筆している。だが、その字は明らかにジーナさんのものではなかった。つまり、男性が自分で書いたのだろう。

野性味溢れる見た目に似合わない流麗な文字で『メル』とだけ記されていた。

意外とシンプルな名前。もっとう『ジュリアス』とか『ジークフリート』みたいな派手な名前かと思っていた。

彼の姿を思い浮かべてみたら、そんな豪華な名前がよく似合う。あまりの似合いっぷりに、思わずクスクス笑ってしまう。

「何がおかしいんだ？」

すぐ後ろ、それも耳元で急に低い声があった。びつくりして振り返ると、件の男性客が立っていた。先程よりも軽装になっている。外套を着ていたときは気付かなかったが、とてもスタイルがいい。程よく筋肉がついた長い手足。小さい頭。典型的な日本人体型の私とは大違い。

口角が少し上がっているが、その瞳は鋭く、私を観察しているようだ。

とてもじゃないが『顔に似合わずシンプルな名前だと思って』なんて馬鹿正直に言えるはずもなく……

「いえ、思い出したことがあって」と言葉を濁し、愛想笑いをした。

一瞬の間を置いて、「そうか」と笑みを浮かべる男性。

その笑顔を見て、心臓が高鳴る。

長身で金髪碧眼のワイルドな美形で金払いもいって、どこの王子様ですかー!?

この世界でなく、日本で出会っていたならば……とつくづく思ってしまう。

というのも、私はこの世界では恋愛しないと決めているのだ。

彼氏に操を立てているわけではない。何せ彼には、紗枝という素敵な伴侶がきたらしいのだから。今ではもう彼のことは、過去の人と割り切っている。

——私がこの世界で恋愛をしない理由。

それは、日本への帰還をまだ諦めていないからだ。

ここで暮らし始めて三年が経つものの、幸か不幸か愛を告白されたことはない。村の青年が私を憐れんでか、アクセサリーをプレゼントしようとしてくれたことは何度かあった。だが、その程度だ。

そんなことを思い出しながら、男性に問いかける。

「メルさん、お食事になさいますか？ 少し早いです、今なら食堂もすいてますし」

早速、宿帳に書かれていた名前と呼んでみた。

「そうだな、頼む」

食堂へ案内すると、他のお客さんは一人もいなかった。

メルさんがゆつくりと椅子に腰掛けるのを見て、決まり文句を口にする。

「本日のおすすめは、お肉とお野菜の煮込みです」

宿に着いたばかりで喉が渴いているだろうなと思い、水を出した。残念ながらこの世界に冷蔵庫はないため、常温だが。少しでも清涼感をもたせられればと考えて、レモンを入れている。

「まだ何も頼んでいないのだが？」

机に置かれたグラスを怪訝そうに見てから、私に聞いてくるメルさん。

「ああ、この宿ではお水は無料でお出ししてるんですよ。到着されたばかりで喉が渴いているでしょう？ ビールで喉を潤すつても、捨てがたいですけどね」

私がそう言って笑うと、メルさんもつられたように笑った。

「ありがとう」

「いえ。あ、あとよろしければこちらもお使ください」

濡らしたおしぼりを渡す。これはハーブで香りを付けてあり、お客さんからも好評だ。

「で、ご注文はどうされますか？」

メルさんは食事にそれほどこだわりがないようで、先程私が薦めたものをそのまま頼んだ。すぐにでき上がった料理を「お待たせしました」と言っておテーブルに置く。

「薦めるだけあって、美味そうだ」

「この宿の名物料理です。見た目や匂いだけじゃなくて、味も美味しいですよ……って、なんですか？」

湯気の立つ料理を見ながら、私の方にコインを差し出しているメルさん。

「チップだが？」

「あー、いらぬですよ？」

苦笑しながら断ると、メルさんの視線が料理から私に移った。

「いらぬい？」

「ええ。お客さんから、チップはいただいてませんので」

「……これだけのサービスをおきながら、チップを断るのか？」

「サービスと言われても、全部普通のことですし……」

日本では、ごく当たり前に行われているサービス。それが海外では非常に高く評価されているということを知っていた。

もしかしたら、異世界でもそうなんじゃないか。そう思って私が提案したこれらのサービスは、見事に当たりしたのだ。

近くの村の宿屋に泊まるくらいなら、サービスの良いこちらの方が……と、わざわざこの村に足を延ばしてくれるお客さんもいるほどだ。

もちろんジーナさんの人柄や、ヒューゴさんの料理もこの宿の売りなんだけど。

初めは「別料金を請求されるんじゃないか？」なんておっかなびつくりだったお客さんも、今で

はずっかり慣れてしまったようだ。だから、こういった反応は久しぶりだった。

「……そうか、当たり前か」

メルさんは小さく呟いたあと、突然クツと笑い出す。

「あのう……どうされましたか？」

少し戸惑う私をよそに、彼はひとしきり笑ったあと、ようやく口を開いた。

「すまない。なんでもないんだ。……よければ名を覚えてくれないか？」

「名前ですか？ 肉と野菜の煮込みとしか……。あえて他の言い方をするなら、シチューですかね？」

突然尋ねられて戸惑いながらもそう答えると、彼は眉を擡めた。

「料理の名前じゃない。君の名だ」

「えっ？ わ、私の名前ですか？」

まさか名前を聞かれるとは思っていなかったもので、狼狽えてしまう。

だが村人のみならず、店の常連客なら誰でも知っているので素直に答える。

「え、と……セイラです」

「セイラか、良い名だな。ありがとう、セイラ」

満足気に私の名を口にするメルさんに、「はあ」と返事をし、首を傾げながらその場を離れる。そのとき、宿泊客の一人が二階から下りてきた。

「ああ、丁度良かった。セイラさん、チェックしてくれるかい？」

「それは構いませんけど……こんな時間にチェックアウトなさるんですか？」

まだ明るいけど、もうじき日が暮れる。しかも戦が起ころうかという緊迫した時期だ。夜に出歩くのはおすすめでできない。

「ああ。のつぴきならぬ事情だな」

「そうですか……お夕食は？」

「食べたかったんだが、時間が無い。よりにもよって今日、煮込みの日かあ」

くんくん匂いをかぐ彼。辺りにはメルさんの食事の匂いが漂っている。

「あー、良い匂いだな……」

しょんぼりする彼に、「ああ、そうだ！ ちょっとだけ待ってもらっても大丈夫ですか？」と言つて、私は一度奥に入った。

「お待たせしました。煮込みには到底及びませんが、これ、良かったら持って行ってください」

そう言つて笑顔で差し出した物——それは、試作品のクッキーだった。

試作品といつても、ヒューゴさんとジーナさんにはすでに試食してもらつており、あとは小分けして宿泊客に配ろうと思つていた物。それを少し多めに袋に入れて持つてきたのだ。

「え、もらつちやつていいのかい？」

「いいですよ。お客さんに食べてもらおうと思つて作つたんですから」

遠慮気味の宿泊客に、半ば押し付けるように渡す。

「ありがとうございます。セイラさんのお菓子は、いつ食べても美味しいけど、これは格別だろうな！」

「褒めてもらつても、それ以上はあげませんからね」

彼があははと笑つたので、つられて私も笑う。

その後、精算を終えた宿泊客は「また来るな」と言い、笑顔で手を振りながら出て行つた。

ふと背中に視線を感じ、振り返る。すると、メルさんが私を見ていた。

「どうかなさいました？」

そう尋ねたが、メルさんは答えなかった。

テーブルの上の料理は順調に減つているようだし、水もビールもまだグラスに残っている。

ま、用があれば呼んでくれるよね？ と思い、その場を離れた。

数十分後、「美味かった」とだけ言い残し、メルさんは二階への階段を上がつていった。

何だか機嫌が悪そうに見えたが、私は気にせずその背中に声をかける。

「おやすみなさい」

すると、階段の途中でふとメルさんの足が止まった。

まさかクレームか？ と構えたが、振り向いた彼の表情は想像していたものよりも柔らかい。

「セイラ、おやすみ」

フツと笑つたあと、機嫌が悪いように見えたのは気のせいかと思うほど軽い足取りで、階上へと消えていった。

そのたった一言で、胸が大いにざわつく。見つめられ、名を呼ばただけで心臓が跳ねてしまつたのだ。

気持ち落ち着けようと、先程まで彼が座っていたテーブルを片付ける。誰も他人に興味のない都会とは違い、ここはとて狭い村社会。お互いを名前で呼ぶのが普通だ。だからさつき名を聞かれたのも、取り立てて意味のあることじゃない。

名前を呼ばれたくらいでいちいちときめいていたら、今年七十二歳になる村長にまでときめくことになるじゃない!!

それにメルさんみたいな素敵な男性が、私のように平凡な女を相手にするはずもない。

……なのに、何意識してんだか。無駄だって。

そう思いつつも、メルさんが消えた階上をつい見てしまうのだった。

だがすぐに、そんな呑気なことをしていられなくなる。夕飯どきになり、食堂が混み始めたのだ。慌ただしく仕事をこなし、終わったときには日付が変わるうかという時刻になっていた。

二階の部屋に戻る途中で、やっぱり角部屋を見ってしまう。

無理やり視線を逸らし、寝ているお客さんの迷惑にならないよう、静かに自室の扉を開ける。

「きつとメルさんみたいに素敵な人には恋人の一人や二人……いや旅人だから、あちこちに現地妻がいたりして」

そんな風に思い込もうとするけれど、やっぱり気になってしまう。

名前を聞かれただけ。笑いかけられただけ。名前を呼ばれただけ。ただそれだけなのに……

……だめだめ！ 恋愛しないって決めているでしょ！

自分を叱咤するけれど、動揺を抑えられない。

「明日からどうしよう。普通に話せるかな？」

どうやら、一目惚れというやつらしい。

まるでティーンエイジャーに戻ったような、ソワソワと逸る気持ちを持って余しながら、私は眠れぬ夜を過ごしたのだった。

「今日もないのかあ。どこに行ってるんだろ？」

はあー、とため息をつきながら、店の入口を見る。

思いがけずメルさんに一目惚れしてしまった私だが、翌日からいきなり肩透かしをくらってしまっただ。

メルさんは連日、早朝から深夜まで出かけているようなのだ。それが、もう八日も続いている。

「メルさんのバカ……アホ……おたんこナス」

年甲斐もなくぼそつと呟く。八つ当たりだ。

ちなみにこういったスラングは、日本語で呟いている。

誰かに聞かれても意味が通じないから、気持ちを吐き出すのに便利だったりするのだ。

「俺がどうかしたのか？」

突然声が聞こえ、「ヒイツ」と小さく声を上げて振り返ると、そこにはメルさんの姿があった。

なんか、前にもこんな状況があったような……なんでこんなに間が悪いのよ！

そう思ったが、そんなことはおくびにも出さず笑顔で答える。



「い、いいえ。どうもしませんよ？」

「俺の名を言っただろう？　だがそのあとが聞き取れなかった。何と云ってたんだけ？」

……『異世界の言語で、あなたを罵ののしつてました』。なんて言えるわけがない。

何か上手くごまかせる手はないかと考えても、出てこない。

こういうときは、奥義・質問に質問返し！

「いえ、あの、えーっと……あ、今日は珍しく早いお帰りですね。用事は終わりましたか？」

メルさんは器用に片眉だけを上げて『おや？』という表情を見せる。

おそらく強引に話題を変えたことに気付いたのだろう。それでも私の質問に答えてくれるあたり、優しい人だ。

「ああ。完全には言えないが、大体は片付いたな。明日からはようやくゆつくりできる」

「そうですか、じゃあ久しぶりに夕食もこちらで召し上がるんですね。今日はとても良いウサギのお肉が入りましたよ」

上手く話題を逸そらせたようで良かったと安堵したとき、意地の悪い笑みを浮かべたメルさんと目が合った。

「ウサギか、楽しみだな。……で？」

「はい？」

「俺はセイラの質問に答えたが、セイラは俺の質問には答えてくれないのか？」

ええ!?　そこに戻っちゃうんですか？　意地悪な笑いの意味はこういうことか……

メルさんって、もしかして性格悪い？　というか腹黒い？　安心させたあとに突き落とすとか、やめてください、ホントに！

文句はいくらでも出てくるが、ごまかす方法は一向に考えつかない。

わずかな希望を込めてメルさんを見上げるも、依然として意地悪な笑みを浮かべたまま。私が話すまでしつこく粘りそうだ。

結局、私は正直に謝ることにした。

「え、つとですね……メルさんの」

「俺の？」

「……薄情者、と云っておりました」

バカ・アホ・おたんこナスに相当するこちらの言葉が思いつかず『薄情者』と云ってみたものの、余計ひどかったかもしれない……

「ほお、薄情者ねえ。なぜそういうことになるのか、じっくり教えてもらいたいな」  
目を細めてニヤリと笑うメルさんに、ひたすら謝る。

「すみません。すみません」

ペコペコと謝る私が面白かったのだろう、メルさんは今度は声を立てて笑った。

「いや、冗談だ。怒っていない。だが……」

「……だが？」

「薄情者と言っているようには聞こえなかったんだが、あの言葉は方言なのか？」

「いえ……あれは、私の生まれた国の言葉なんです」  
少し迷ったが、本当のことを話す。

「生まれた国か。どんな言葉なんだ？ もう一度言ってみてくれないか？」

「え、っと、『バカ、アホ、おたんこナス』です」

「『バカアホオタンコナス』……長いな。それで一つの言葉なのか？」

「いえ、三つの単語です」

メルさんが一文字も間違えずに再現してみせたので、私は驚きを隠せない。よほど耳が良いのか、頭が良いのか……

「三つ？ 全部が薄情者という意味なのか？」

「ええ、まあ。ニュアンスが違うだけで、同じような意味です」

「そうか。……それにしても発音が難しいな。聞いたことのない響きだ」

そう言っつて真面目な顔で『バカ』だの『アホ』だの呟つぶやいている。

どうしよう。私のせいでイケメンが、変な日本語を真面目な顔で練習してる……。複雑な思いで、それをただじっと見つめる。

何回かその言葉を繰り返していたメルさんは、とてもきれいな発音になったところでようやく練習をやめた。

「で、どうして俺は薄情者だと言っただ？」

「う……すみません」

メルさんに会えなくて八つ当たりしてたなんて、絶対に言えない……。そんなことを口にしたら、恥ずかしさのあまり顔から火が出てしまっそうだ。

「まあ、言いたくないならいいさ。だが悪いと思ってるなら、明日一日、俺に付き合ってくれるか？」

黙り込んでしまった私を見て、メルさんはとても嬉しい罰を与えてくれた。

「は、はい！ あっ、でもジーナさんに聞いてからじゃないと……」

急な話だし、『店が忙しいからだめ』と言われるかもしれない。

「俺からも頼んでおく。ただこの村を案内して欲しいだけだ。取って食いやしない。そんなに不安そうな顔するなよ」

メルさんが苦笑しながら、私の頭をポンポンと優しく叩く。

三十路みそじ手前の私を子供扱い！ だめだ。この包容力は危険だ！ 女の子は頭ポンポンに弱いんだよう。うう……

ドキドキと胸が高鳴るのを止められない。

デートだ……。これってデートって言ってもいいよね？

赤くなったり青くなったりしている私を見て、勘違いしたのだろう。

「別にさっきのことは怒ってない。むしろセイラを誘う口実ができてありがたいくらいだ」

メルさんは優しく笑うと、実に男らしく言い切ったのだった。